

宇田川文海とシェイクスピア

近藤弘幸

(Kondo Hiroyuki)

はじめに

1885年5月16日、道頓堀のとある劇場の舞台に一本の芝居がかけられた。その概略を、河竹登志夫は次のようにまとめている。

明治十八年（一八八五年）五月、大阪戎座において、中村宗十郎〔1835-1889〕以下の歌舞伎俳優により「何桜彼桜銭世中」が初演されたが、それについて「松竹関西演劇誌」には、「沙翁のヴェニス商人の翻案で、大阪最初の翻案劇であった」と記されている。明治十八年といえば、わが国における欧化熱が殆ど絶頂に達した時で、外国文学の翻案上演はもっと早くに東京で行われていたし、シェイクスピアの翻訳、再説などもこの以前に既に公刊されていた。だがシェイクスピアを取り入れたものが上演を見たのは、おそらくこの「銭世中」が日本における最初だったと思われるのである。しかもそれは純然たる歌舞伎の世界に生れながら、新聞という有力な機関とタイアップして非常な評判をかち得るなど、西洋文物の流入当時にあって先駆的役割を果たした重要なものの一つとして注目に値いすると思う。¹

¹ 河竹登志夫、「歌舞伎化された「ベニス商人」——何桜彼桜銭世中」、『シェイクスピア研究』（日本演劇学会編、中央公論社、1951年）75-106頁、78頁。『何桜彼桜銭世中』については、以下を参照。鈴木邦彦、「『何桜彼桜銭世中』研究」、『商学論究』50巻4号（2003年）、93-119頁。白川宣力、「何桜彼桜銭世中——もう一つの台本をめぐって」、『演劇学』31号（1990年）、153-163頁。平辰彦、「『ヴェニス商人』と『何桜彼桜銭世中』——その台本と上演をめぐって」、『英学史研究』27号（1994年）、165-178頁。

河竹が指摘しているとおりに、この『何桜彼桜銭世中（さくらどきぜにのよのなか）』は、1885年4月11日から5月20日にかけて大阪の『朝日新聞』に連載され人気を呼んだ新聞小説に、潤色を加えたものであった。その作者、宇田川文海（1848-1930）は、幕末の江戸に生まれ、明治維新後、大阪の新聞社で活躍した文筆家である。かくして宇田川文海は、「最初のシェイクスピア（翻案）上演の〈原作者〉」といういささかねじれた存在として、日本におけるシェイクスピア受容史にその名を刻むこととなる。

一方で、この宇田川文海がどのような人物であったのか、ほかにどのような作品を残したのかが、日本におけるシェイクスピア受容を論じる研究者の関心を引くことはなかった。多くのシェイクスピア研究者にとって、宇田川文海は、『何桜彼桜銭世中』の原作者である、というだけの存在でしかない。しかしながら彼は、女性参政権を扱った作品を執筆し、その思想は先駆的な女性ジャーナリスト、管野スガ（1891-1911）に継承されている。彼はまた、様々な西洋文学の翻案小説を残し、その中には『何桜彼桜銭世中』以外にもいくつかのシェイクスピア物が含まれている。本論の目的は、こうした宇田川文海の人物像を素描し、さらに彼の残したシェイクスピア翻案物に関する基本的なデータを整理することである。本論が、この軽視された文筆家がシェイクスピア受容に果たした役割を再検討するための一助となることを期待する。

宇田川文海の生い立ち

宇田川文海は、1848年2月24日に江戸本郷新町の道具屋「伊勢屋」の三男として生を受けた。幼時に両親を失うが、丁稚奉公を経て駒込の養源寺に入門、得度して恵海を名乗る。「師匠の南明和尚は、直接には、關老稲葉侯の顧問、間接には、徳川幕府の参謀と言ふ可く、所謂黒衣の宰相的の人物」であり²、公武合体論の実現に奔走していたため尊王攘夷派とは敵対する関係にあった。このため、1861年7月下旬のある日、南明は湯島の麟祥院からの帰途を水戸浪士に襲撃され、同行していた恵海も顎に重傷を負うこととなる。

² 宇田川文海、『喜寿記念』（宇田川翁喜寿記念会、1925年）、3頁。

やがて蓮光寺といふ寺の、門前近い所まで来かゝると、後から来た師匠は、アツといふ一声を叫ぶと共に、ドーとばかりに倒れた。私は此時何の気もなく……師匠は酒を過してゐる故、石に躓いて転んだのだらう……と考へ、早く扶け起して進ぜやうと思つて、急に振り返りさま、手に掲げてゐた提燈を、首より高く振上げたが、そのトタンに提燈と共に、右の頬から胸へかけて、ハスに一太刀斬りつけられ、ハツと驚いて、一ト足後へ飛退る間もなく、二度目の太刀は左の顙に斬りつけられた。³

その後、傷跡を気に病んだ惠海は、「養源寺の門より外へとは、只の一步も出る事なく、朝夕の勤行、炊事掃除等の、寺務の手伝ひをする外は、只管読書と瞑想に耽るのみ」⁴の生活を送る。転機が訪れたのは「慶應二年〔1866年〕の春の一日の事、何の気もなく本箱から「武邊咄聞書」といふ写本を抽出し、慰み半分に」読んだときのことである。徳川家康が、腫瘍の跡を気にする次男秀康を一喝したという挿話を讀んだ惠海は、心を入れ替える。ちょうどその頃、下総結城の華藏寺に住職見習いとして赴任することとなった惠海は、「今までの厭世主義にひきかえて、活発々地の人となり、〔…〕盛んに道を説き、禅を談じて、年には増せた活動」⁵に精進する。明治維新後、廃仏毀釈運動の流れの中で仏道を断念した惠海は還俗して帰京、鳥山捨三と名乗ってささやかな文筆業で糊口をしのぐ。やがて彼は、長崎で活版印刷技術を習得してきた兄の貞次と再会する。兄のもとで印刷術を学んだ捨三は、印刷工を経て記者となり、宇田川文海の名で新聞業界にその活躍の場を見出していくことになる。

こうした半生を、自身も『大阪日報』（そのインクの色から「赤新聞」と俗称された）を刊行して関西新聞界に一時代を築いた吉弘白眼（吉弘茂義、1870-?）は、次のように描写している。吉弘の記事は、「勤王」「佐幕」のラベルにいささか疑問が残るものの、事実関係については比較的正確なものと言えるだろう。

宇田川文海幼名を惠海と称し某寺の小僧たり一夜師僧に伴随して本郷に至る途佐幕党の壮士某師僧を狙撃せんとして先づ文海が携ふる所の提燈を斬る白刃余つて文海の腮を裁断す兩人狼狽闇夜に紛れて遁れ纒

³ 宇田川文海、『喜寿記念』、4頁。

⁴ 宇田川文海、『喜寿記念』、6-7頁。

⁵ 宇田川文海、『喜寿記念』、9頁。

かに一命を全ふする事を得たり蓋し師僧ハ勤王家の一人にして常に佐幕党の怨を買ひしを以てなり文海之れより戸を閉ち交を絶ち一意専心古今の小説本を涉猟し遂に関西小説家の牛耳を執るに至る⁶

一方、隅田了古（細島晴三、生没年不明）が『新聞記者奇行伝初編』に残した伝記は、事実誤認を含むうえに、かなり冒険活劇風に脚色されている。隅田は、宇田川文海が「下総国結城の人幼年出家して紫衣を纏ふの志を立んと江戸湯島切通し麟祥院の所化」となったとする。ある夜、その麟祥院に、浪士ではなく金目当ての強盗が押し入る。強盗は凶器を突き付け、金のありかを問いたが、恵海は勇敢にも知らないと言っばねる。「住職の眠蔵に案内せよ」と迫る強盗と「賊なり」と大声を上げる恵海。強盗は「大に怒て憎き小坊主哉と罵り白刃を振て首を刎んとし過つて其腰に重傷を負して」立ち去る。こうして宇田川文海は頸を失い、「経文を読誦する事能はざる故に青雲乃意を断ち髪を蓄へて文壇に遊び同郷の人赤荻文平君が設立せし浪華新聞の編輯を助け後に大坂新聞社に入り又魁新聞の印刷長と成て艶筆を振う」こととなる。そこで多彩な活躍を見せた宇田川文海のことを、隅田は「野史雑誌戯場評判記に至るまで皆君が手に成ざるもの稀なり実に明治の西鶴自笑と称すも誣言ならず」と結んでいる⁷。

『魁新聞』時代

隅田了古が言及している『魁新聞』は、『朝日新聞』の初代編集長として活躍した津田貞（1845-1882）が、社主と衝突して同紙を飛び出し、1880年8月20日に創刊した新聞である。野崎左文（1858-1935）は、当時の大阪訪問を述懐し、同地における宇田川文海の存在の大きさを次のように振り返っている。ここで

⁶ 吉弘白眼、『当世名士譚』（大阪国文社、1892年）、56頁。「勤王」「佐幕」のラベルに関しては、後述する宇田川文海の代表作『巷説二葉松』が影響を与えている可能性も考えられる。

⁷ 隅田了古、『新聞記者奇行伝初編』（墨々書屋、1881年）、14頁。ただし同書は、表裏2頁を同一頁としているため、通して数えると27頁目になる。赤荻文平（生没年不明）は「下総結城の儒者、兼て書を能くした、文海の友人」である（宇田川文海、『喜寿記念』、18頁）。宇田川文海が「下総国結城の人」であるというのは隅田の誤りであり、赤荻は宇田川の「同郷の人」ではなく華嚴寺時代の友人である。

野崎が『此花新聞』としているのは、『魁新聞』の誤りである。

又此時には津田貞氏（高知県人にして僕の叔父とは親交があつたとか）が此花新聞の発行準備の真ツ最中で丁度東京から若菜貞爾、山崎年信二氏も招聘に応じて来坂中で、若菜氏の紹介で今の宇田川文海氏他の人々と一夕の会合を催したやうに記憶する。此の宇田川氏は当時関西に於ける新聞小説家の泰斗で名声嘖々、続き物と云へば同氏の筆に限るものとされて居た。⁸

若菜貞爾（若菜狐蝶園、1854-1918）は宇田川文海と同じく新聞小説家として活躍した人物であり、『魁新聞』創刊号には「印刷長 宇田川文海」の前に「編輯長 若菜貞爾」の記載がある⁹。翌21日からは、「幹事 津田貞」「編輯長 若菜貞爾」「印刷長 宇田川文海」が並んでクレジットされるようになり、この状態が10月17日まで続く。休刊日を挟んで10月19日からは、それが「假編輯長 乳井吉之丞」「印刷長 宇田川文海」「幹事 津田貞」「校閲 若菜貞爾」に変更されるが、特に断りはない¹⁰。その後、12月10日の第4面には「弊社校閲若菜

⁸ 野崎左文、「明治初期の新聞小説」、『早稲田文学』1925年3月号（第2期229号）16-51頁、50頁。この文章は、大幅に加筆されて、野崎左文『私の見た明治文壇』（春陽堂、1927年）1-81頁に再録されている。ここでは『此花新聞』が『魁新聞』に訂正されているが、加筆された宇田川文海の略伝は、隅田了古の『新聞記者奇行伝初編』の引きうつしであり、宇田川は「元下総結城の人、幼年出家して江戸湯島切通麟祥院の所化と」なったとされている（79-80頁）。同書は、関連文書を加え、二分冊で『増補 私の見た明治文壇』（平凡社、2007年）として復刊されている。この復刊では、第1巻の91頁を参照。なお、第2巻235-241頁には、野崎が宇田川文海死去時に寄せた追悼文「噫宇田川文海翁」も収録されており、そこでは野崎は、隅田を引用したうえで、「生国を下総結城としたのと、強盗の為に重傷を負はされたとあるのは事実相違」と指摘している（235-236頁）。

⁹ 『魁新聞』、1880年8月20日、第4面。同面には、創刊にあたっての宇田川文海のコメントが掲載されていた可能性が高いが、国立国会図書館のマイクロフィルムに収められた創刊号は、第3面と第4面の上半分が欠落しており、確認することができない。

¹⁰ 乳井吉之丞なる人物については、詳細が分からない。宮武外骨と西田長寿の『明治新聞雑誌関係者略伝』（みすず書房、1985年）にエントリーがあるが、『日本立憲政党史新聞』の明治一六年〔1883年〕一〇月一四日第四六一号から同一六年一二月一八日第四八九号までの署名社主兼印刷人」としか記されていない（146頁）。岡田益男の『東北開発夜話』（河北新報社、1956年）には、1876年の明治天皇東北行幸の際、「本塾〔東奥義塾〕優等生珍田捨巳（英国大使、侍従長）、佐藤愛麿（仏国大使）、川村敬三、伊東重（伊東病院長）、森可次、藤林良司、工藤儀助、乳井吉之丞、田中五郎、武田邦雄の十名が英語で御前講演をした」との記載がある（137頁）。宇田川文海は、1873年から2年間、「秋田の活版所に於いて、印刷の職工長と遼瀋新聞（此の新聞の名は日本新

貞爾儀熟議の上今般退社致し候に付小宮山昌繇を以て校閲の事を担当為致候間
依旧御愛顧の程奉壹萬企候」という社告と若菜自身の退社・転居広告が掲載さ
れ¹¹、この日から校閲のクレジットも小宮山昌繇すなわち小宮山天香
(1855-1930)に変更される。

ここで名前が挙がっているもう一人の山崎年信(1857-1886)は錦絵師で、新
聞連載小説の挿絵画家として活躍した。野崎によれば、彼は月岡芳年(月岡米
次郎、1839-1892)の門下生であり、「同門中非凡の筆才があつた人で、又画道の
研究にも頗る熱心」だったが、「惜しい事には酒の為めに屢々身を誤り、又芳年
氏の許諾を得ずして或る粉本を持去つたとかいふ罪で、師匠から破門せられて」
大阪へ赴き、『魁新聞』の挿絵を担当することとなった。「頗る仙人風を帯びて
居て、突飛な挙動があつたに拘はらず少しも憎気のない人であつた」という¹²。
『魁新聞』の同僚には、ここに挙げた若菜貞爾、小宮山天香、山崎年信のほか
に、半井桃水(半井洌、1860-1926)がいた。

先の引用に続けて野崎は、当時の関西の新聞界におけるある習慣についても
言及している。

故に自社以外地方新聞の小説にも宇田川氏の名が無ければ売れぬとい
ふ程の評判であつたが、自社——始めは此花後には朝日——のものは自
ら脚色し自ら筆を下すにしても、他社の分は別に代作者があつて大体の
骨組を作つたのを、文海氏が潤色して送るのであつた。是れは唯同氏ひ
とりではなく関西に於ける小説家の間には多く此の方法が行はれ、一作

開発達史に出てある)の主筆を兼ねて、ともかくも其職務を勤め」た(宇田川文海、
『喜寿記念』、12頁)。二人の接点は、この時に生まれたのかも知れない。

¹¹ 『魁新聞』を去つた若菜貞爾は、1881年1月から『朝日新聞』で連載を始める。し
かしながら、「若菜の小説は、世界立てがきまつたように、吉原や深川、洲崎と東京の
花街、それも小格子の女郎が女主人公となるものが多く、筋立ても描写もすべて上方
の人情風俗とは水と油のような異質のものが多かつたので、手際よくまとまつた割に、
読者受けがぱっとしなかつた」(松浦直治、「大阪朝日新聞掲載小説の変遷——明治・
大正の巻」、『大阪朝日新聞掲載小説年表』(朝日新聞社史編修室、1960年)80-101頁、
84頁。若菜貞爾は、宇田川文海が朝日新聞社に入社したときには、すでに同社を退社
していたようである。朝日新聞社史編修室、『上野理一伝』(朝日新聞社史編修室、1959
年)、245頁および野崎左文、「噫宇田川文海翁」、239頁を参照。

¹² 野崎左文、「明治初期の新聞小説」、45-46頁。『私の見た明治文壇』、71-72頁。『増
補 私の見た明治文壇』、第1巻83-84頁。

者の下には必ず一兩人の小説下拵へ役が附いて居た。¹³

多彩な執筆陣を擁した『魁新聞』は、その充実した紙面で急成長を遂げ、一時は『朝日新聞』を上回る発行部数を誇った。しかしながら、津田貞は、編集者としては優秀であったものの経営者としては無能であり、その栄華もつかの間、『魁新聞』は一年あまりで廃刊の憂き目を見ることとなる。

『朝日新聞』時代

『魁新聞』廃刊後、宇田川文海は野崎が述べているとおり、朝日新聞社に入社する。1881年8月28日から『朝日新聞』紙上に『嫩の錦（ふたばのにしき）』の連載を開始した宇田川文海は、9月7日の紙面で、以下のコメントを発表している。

小生義去年八月以来魁新聞社に在て印刷と編輯の務に従事する事殆ど満一ヶ年津田小宮山の諸氏と相共に協力同心全腦の力を盡して許多の艱苦に耐へしハ江湖諸君の熟知する處なれば今更喋々の弁を用みず然るに遂に其甲斐なくして頃日該新聞休刊社員解散の慘状と現ずるに至りしハ実ハ遺憾の極と謂ふ可し此時に当りて本社社主村山君〔村山龍平、1850-1933〕幸に小生の魯鈍を棄られず来て本社の編輯を補助せよとの懇招に預りたり小生其優渥の情誼に感じて則ち本日より入社編輯の席末に連り前に魁社に向て盡したる精神を以て飽まで本社に向て盡す處あらんとす本紙愛読の諸君ハ更なり魁新聞愛読の諸君も亦併て予が拙劣を捨られず尚旧に依て愛顧せられんことを偏に希ふ¹⁴

さらに翌年、宇田川文海は、大ヒット作『檐の橋（のきのたちばな）』を生み出す。

十五年〔1882年〕になると、宇田川文海が「北国奇談檐の橋」を書いて、一躍文名を関西の地に謳われるようになった。そしてこの「檐の

¹³ 野崎左文、「明治初期の新聞小説」、50-51頁。『私の見た明治文壇』、80頁。『増補 私の見た明治文壇』、第1巻91-92頁。

¹⁴ 『朝日新聞』（大阪）、1881年9月7日、第4面。

橋」では作者の外に原稿者（資料調査と資料提供とプロットの立案とを兼ねた「朝日新聞」独特の組織、その詳細は「上野理一伝」二四九—二五〇ページ「小説の資料調査」の項参照）の役割がハッキリきまってきたわけで、「檐の橋」の場合、探訪者中の最古参、佐伯江南斎が原稿者として一切の種出しの役をつとめたわけである。¹⁵

こうして新しい舞台を得た宇田川文海は、朝日新聞社設立メンバーの一人でもあった岡野半牧（岡野武平、1848-1896）とともに同紙上で数多くの人気作を連載していく。野崎は、「他社の分は別に代作者があつて大体の骨組を作つたのを、文海氏が潤色して送る」としているが、少なくとも『朝日新聞』移籍後は、自社における連載であっても「小説下拵へ役が附いて居た」と考えることが妥当であろう。

朝日新聞社移籍後の宇田川文海の人気について、伊原青々円（伊原敏郎、1870-1941）は次のように述べている。

又ずつと以前に『大阪朝日』に宇田川文海氏と云ふ人が居つた（今は名古屋に書いて居る）、氏は新聞小説家として関西に怖るべき勢力を有し『朝日』の売出したのも此人とつて力ありと云ふ勢であつた。氏の作は『檐の橋』を始めとして『巷説二葉松』など何れも評判のよいものであつたが、材料は重に幕末から一藩に尊王攘夷の派の分れた云ふ御家物で、稀には現代男女の情を描いた人情本的のものもある、又『人間万事銭世中』と云ふ題で沙翁の『マーチヤント、オブ、ヴェニス』を翻案した事もあつた。沙翁物を翻案したのは此人が始めてであらう。又此人の作は多く場を上して盛況を得たが、中にも『巷説二葉松』の如きは新聞物の『忠臣蔵』と迄称せられて、芝居がはやらなくなるとかならず之

¹⁵ 松浦直治、「大阪朝日新聞掲載小説の変遷」、85頁。ここで言及されている朝日新聞社史編修室『上野理一伝』249-250頁には、坪内逍遙、「浪花芸者——未発表日記」、『中央公論』1955年9月号254-263頁の一節が引かれている。この日記は1887年8月に坪内が朝日新聞社の招きで大阪を訪問したときのものであり、8月7日付で「此日段々話をきけば、朝日の続物は総て十分の原稿アリテ、小説係は之を刪正増補するに留まるなり」という記述がある（259頁）。佐伯江南斎（佐伯久作、1843-1913）は、「骨董商にして書と俳諧の宗匠」であり、かつて『浪華新聞』の「探訪者」すなわち「社会部の外勤記者」として働いていた（宇田川文海、『喜寿記念』、22頁）。

を出したものである。¹⁶

ここで言及されている『巷説二葉松（こうせつふたばのまつ）』は、1883年10月16日から1884年1月25日まで連載された宇田川文海の代表作である。幕末から明治維新の尾張藩を舞台に、佐幕派の陰謀と勤王派の勝利を描いたこの作品は、連載終了後ほどなくして勝能進（1821-1886）、諺蔵（1844-1902）親子の手によって『若緑二葉松（わかみどりふたばのまつ）』という外題で戎座の舞台に掛けられて人気を博し、その後、改変を加えられながら長く大阪のみならず東京の劇場をも賑わすこととなった。この連載と舞台化を検討した相良真理子は、その論考を「宇田川の小説は、御家物という古臭いスタイルをとりつつも、明治維新を起点とする近代化を庶民の視点で肯定していた。彼の小説をもとにした芝居は、舞台装置の華やかさとあいまって、近代社会成立期の都市の人びとの心をひきつけたのであった」という評価で締めくくっている¹⁷。もうひとつの『ヴェニスの商人』の翻案について、伊原はこれを『人間万事銭世中』としているが、正しくは言うまでもなく『何桜彼桜銭世中』である。

こうした朝日新聞社在籍時代の宇田川文海の活躍ぶりを、朝日新聞社史編修室の松岡直治は、岡野半牧との比較を交えて次のように描写している。

この時期から「朝日新聞」の小説壇には半牧と文海の対立状態が出現する。文海と半牧は、ともに柳亭派の作風をよろこび、ことに初代種彦〔柳亭種彦、1783-1842〕の筆致をよく学んだ。しかし両者の種彦に学ぶところはもともと別種なものであった。

半牧は巧妙なストーリー・テラーとして種彦を学び、地の文と会話のやりとりに工夫をこらした。その地の文は種彦もどきに温雅、典麗、ネットリした味があって、上方ではじめて小説に接する子女たちにすこぶる喜ばれたことは、種彦が大奥や長局の女中衆に盲拝されていたのと同断であろう。

¹⁶ 伊原青々園、「新聞小説の変遷」、『早稲田文学』1907年4月号（第2期第16号）147-156頁、154-155頁。

¹⁷ 相良真理子、「宇田川文海の人気作品と道頓堀上演——続き物作家の思想と時代背景について」、『史泉』114号（2011年）1-18頁、15頁。大塚豊子、「宇田川文海作「勤王佐幕巷説二葉松」について——明治初期の「つづき物」の世界」、『学苑』409号（1974年）152-170頁も参照。

文海が種彦に学んだところは、構想の妙味と、演劇趣味の活用と、翻案脱化の器用さなどであった。文海は世界立てをするとき、主に和田風月ら原稿方の意見を容れて、歌舞伎の作者の脚本と同様、あらかじめ劇化されることを予定し、主人公には何某、副主人公は誰それと、意中の上方役者の芸風に応じて登場人物の性格を作り出すことに妙を得ていた。かれはこのため地の文を短かくして、会話で筋を運ぶことが得意であった。¹⁸

岡野半牧がいわば「近代小説」を志向したのに対し、宇田川文海の手書き物はかなり「演劇的」なものであった。また、宇田川文海の方が「原稿者」との協働作業に積極的であったことがうかがえる。野崎は、「其の原稿者としては中村狸遊、和田風月、榎野半酔、奥村柁兮、加藤半紅等の諸氏が知られて居た」と述べている¹⁹。このうち、中村狸遊（中村善平、生没年不明）は、『浪華新聞』の「新聞投書家」であり、「雑俳の宗匠、後に朝日新聞探訪者」、和田風月（和天喜三郎、生没年不明）も同紙の「新聞投書家」で、「演劇、院本、小説の創作に天才を持つてゐた、後に朝日新聞探訪者」。加藤半紅（加藤信二郎、生没年不明）は「新町の揚屋松月楼の次男」で、かつて『浪華新聞』の「探訪者」として働いていた²⁰。また、中村狸遊は、単行本として刊行された『何桜彼桜銭世中』

¹⁸ 松浦直治、「大阪朝日新聞掲載小説の変遷」、87頁。

¹⁹ 野崎左文、「噫宇田川文海翁」、240頁。朝日新聞社史編修室の『上野理一伝』は、「小説の資料提供について、一ばん熱心なのは和田風月、榎野半酔、加藤半紅、山本与助、山本全九らであった。榎野と加藤の外はずでに「朝日新聞」に籍を置いていなかったが、なお資料漁りの労力を少しも惜しまなかった。旧藩時代から残されたお家騒動や派閥争いなどの記録を集めてくるのは古本屋を兼ねていた山本兄弟であった。大阪の町家や芝居街や廊に関する古い文献を提供するのは和田風月であった。榎野や加藤は京都の旧公家やそれに属する旧諸大夫を訪ねたり、平瀬露香や鴻池新十郎のような大阪の旧両替商中の知識人に話を聞いたりして、もっぱら足による取材を受持っていた」と記している（249頁）。

²⁰ 宇田川文海、『喜寿記念』、22頁。そこでの宇田川の説明によれば、「新聞投書家」とは、「匿名、俳名、戯号、雅号を以て、自家の作文を新聞に奇送するのを、一週の道楽としてみた」人々のことである。宮本又次は、「役人でも、実業家でも、大家のダンナでも、さらに好事家でも、新聞に興味を持つ人たちは、新聞社へどしどし投書をしたり、遊びに出かけたものである。そうした人たちを投書家といった」と説明し、「丸亀屋の主人で初代の大阪市長であった田村太兵衛なども投書家の一人であり、三井糸店の若隠居で、府会議員や代議士にもなった豊田文三郎、蠟問屋の主人で、のちに大阪府・市議員になった小森理吉郎、富島町の船道具屋で、大阪府議会議員になった扇谷五兵衛、貸本屋で、俳諧の宗匠であった山本与助、彼の弟の山本全九、米穀商で

に「雨の屋狸遊」の号でクレジットされており、同作の「原稿者」を務めたものと思われる²¹。

1885年10月24日、宇田川文海は『日本絵入新聞』に引き抜かれ、朝日新聞社を退社するが、翌年7月1日には復帰する²²。復帰後の最初の連載は、『蜃気楼』（1886年8月27日から12月9日まで）という作品であるが、これは「わが国小説界でも最も早く女子参政の問題を取扱った作」であり「広津柳浪〔広津直人、1861-1928〕の「女子参政蜃中楼」より一年早く発表されたというのが、文海にとって自慢の種であった」という²³。この小説は、「婦人解放、婦人職業の独立、婦人参政、廢娼問題など当時としては最も耳新しい話題を盛り沢山に」取り込んだものだった²⁴。

『蜃気楼』終了の翌日、12月10日の『朝日新聞』紙上で宇田川文海は、「近來小説世に行れ唯童幼婦女の之を弄ぶのみならず貴族紳士学者論客も亦之を閲して消閑の具と為すに至れり」と主張し、「編者も亦其才学の拙劣なるを揣らず漫に其鞏に倣ひ二十三年国会開設後の世態人情を想像して空中楼阁を脳裏に書き蜃気楼一篇を綴りて本紙に登載せしに幸ひに看客諸君の愛読を辱うし八十余篇の長さも首尾好く全稿を掲ぐる得たり実に感謝の至りに耐ず」と感謝の言葉を述べたうえで、「此に又本日より稿を改めて掲載する一小説ハ編者が拙劣なる意匠を以て著述せる蜃気楼の如きものにあらずして仏国現在の大家ユーージェー

あった小野米吉、和田風月という資産家、心学道話の講師であった徳崎安蔵などが有名である」と述べている（宮本又次、『大阪商人太平記（上）』（宮本又次著作集第9巻、1977年、講談社）、507頁）。

²¹ 宇田川文海、『何桜彼桜銭世中』（和田文宝堂、1886年）、1頁。奥付には「編輯人 大阪府平民 中村善兵衛」という記載がある。

²² 堀部功夫、「宇田川文海伝の筋書」、『同志社国文学』第7号（1927年）75-98頁、83頁。1886年7月1日の『朝日新聞』（大阪）には、「小生儀都合ニ依り本日限り日本絵入新聞社ヲ退ク此段辱知諸君ニ広告ス」という、6月26日付の宇田川の個人広告が掲載されている。『日本絵入新聞』は、若菜貞爾が創刊した「畿内申報」が「此花新聞」となりさらに「日本絵入新聞」と改題したものである（昭和女子大学近代文学研究室、『近代文学研究叢書』第31巻（昭和女子大学光葉会、1969年）、226頁）。1885年10月21日および22日の『朝日新聞』（大阪）のいずれも第4面には、10月16日付同文の「日本絵入新聞発兌之広告」が掲載されている。その広告では、同紙が「有名な記者を聘し高名の書工を雇ひ面白き小説を綴らしめ美麗の挿画を加へて読者の眼を慰むる所あらんとする者」であることが謳われている。

²³ 松浦直治、「大阪朝日新聞掲載小説の変遷」、88頁。

²⁴ 朝日新聞社史編修室、『上野理一伝』、252頁。この作品は、1886年12月3日に上田捨吉名義で駸々堂から出版されている。

ヌ、シュー氏の原著を翻案補綴し以て吾国今日の世態人情を写せしものなり」と新連載の開始を宣言する。こうして始まったのが、七月王政期のフランスにおいて絶大な人気を誇った新聞小説家ウージェーヌ・シュー Eugène Sue (1804-1857) の『七つの大罪』 *Les sept péchés capitaux* (1847-1849) の翻案小説『人心写真絵 (こころのうつしえ)』である。宇田川文海は、原作を「孝貞なる少女の薄命慳貪なる継母の翻心吝嗇なる老翁の用心俊秀なる壮士の赤心等の状態を巧に写し所謂人情の真理を説きたるものにて篇中滑稽あり洒落あり諷諭あり笑ふ可く哀む可く楽む可く怒る可く得て言ふ可わざる妙味のある最面白き物語にて而も毎篇教訓の意を籠たる者」であると紹介したうえで、連載開始の顛末を次のように説明する。

因に云此篇先年其一斑を訳述したる者あれども僅に其十の一にして止みたり編者全璧の世に顕れざるを遺憾に思ひみたるに恰好頃来友人某偶々之が全編を意識して贈られたれば此くは翻案の業に従ひしなり然れども編者が意匠文章の拙劣なる原著の妙の幾分をも尽す能はざるのみか往々却て其体を傷けたる所も多く且恣に蛇足を添へたる處さへ尠なからねば篇中の妙處は原著の力なるは固より言ふを俟ず或は不都合の處あらば編者が罪と見そなはしたまへ英人其公政の醉翁亭の記を訳して其跋に書して曰く原文は玉の如く訳文は瓦の如しと況や編者の拙劣なるシュー氏の妙作を訳するに於てをや実に氏に対して恐懼に耐ざるなり看客に向ひて暫慚に堪ざるなり²⁵

ここで述べられている『七つの大罪』の抄訳とは、1885年3月16日に東京の稽古堂から出版された『人七癖 (ひとのななくせ) —— 吝嗇篇』を指すものと思われる。この翻訳は、扉では二愛亭花実と淡々亭如水の「合訳」とされているが、奥付には「翻訳人 神奈川県士族 森澄徳聡」という記載がある。柳田泉は「花実、如水のうちいずれが森澄か、不明である。訳は大体原書を忠実に訳しているらしく、文章としてはまず佳の方であろう」と評している²⁶。

『人心写真絵』のあとも宇田川文海は、多様な作品を『朝日新聞』紙上に展

²⁵ 『朝日新聞』(大阪)、1886年12月10日、第3面。

²⁶ 柳田泉、『明治初期翻訳文学の研究』(春秋社、1961年)、68頁。ウージェーヌ・シューについては、小倉孝誠『『パリの秘密』の社会史——ウージェーヌ・シューと新聞小説の時代』(新曜社、2004年)を参照。

開していく。「小説作者と名乗って門戸を張るほどのものもないそのころの関西で、文海は一作ごとに読者に好奇の眼をみはらせ、芝居者や地本問屋たちには大家と立てられて、まったく独り武者の威勢を示した」。一方、ライヴアルの岡野半牧は、地味な作風でありながらファンの「数においては文海をしのぐものがあつた」という。

文海はこの半牧の地味な人気を片腹痛いものに見ていた。いま一つ、村山〔村山龍平〕も上野〔上野理一、1848-1920〕も半牧を創刊以来の功労者と立てて、雑報と小説欄の全てを任しているように見えるのも面白くなかった。明治二十年〔1887年〕以後は、そのためか執筆回数も次第に少くなり、二十二年〔1889年〕、東京から渡辺霞亭〔渡辺勝、1864-1926〕、宮崎三昧〔宮崎璋蔵、1859-1919〕、加藤紫芳〔加藤瓢乎、1856-1923〕らが新たに入社してくると入れ代りに朝日を去った。²⁷ 退社の直接のきっかけとなったのは、同年7月、「烈女勝子伝」を執筆中、土居通夫の小さな背任容疑事件の飛沫をうけて司直の調べをうけたことのものである²⁸。当時の紙面には、「予て吾社の編輯に従事致居候宇田川文海氏は都合有之今般其聘傭を解き候に付此段広告致し候」という社告が掲載されている²⁹。

『毎日新聞』時代から晩年まで

翌1890年、宇田川文海はまさに「鳴り物入り」で毎日新聞社に入社する。4月24日の『毎日新聞』には次のような紹介が掲載されている。

関西第一流の小説家として広く其名を知られたる宇田川文海氏は今度我社の記者と為り大に勉励して得意の艶筆を揮はる、本題は乃ち我紙上登壇の披露にして向後同氏は他の我社員と均しく大阪毎日新聞の外に一切筆を執らずして其全力を我紙上に注ぐの約なり画は国峰子〔歌川国峰（1861-1944）〕の受持にして其意匠工夫は文海子これを練り極めて面

²⁷ 朝日新聞社史編修室、『上野理一伝』、252-253頁。

²⁸ 松浦直治、「大阪朝日新聞掲載小説の変遷」、89頁。土居通夫（1837-1917）は、大阪を代表する実業家で、鴻池家の大番頭として活躍した。

²⁹ 『朝日新聞』（大阪）、1889年9月27日、第1面。

白く且極めて美麗ならしめ小説と相併んで文学上の美観を輝かすを期す³⁰

こうして宇田川文海はその活躍の場をライヴァル紙に移し、旺盛な執筆活動を継続していく。吉田香雨（吉田伊太郎、?-1908）は、この記事を受ける形で、「関西第一流の小説家とは大阪毎日新聞の大言なり然れども氏は実にこの大言に負かざるの作者ならん」と述べている³¹。しかしながら宇田川は、世紀の変わり目を迎える頃から時代に取り残され始める。「近世から近代へのバトン・タッチの役目を終った文海は菊池幽芳〔菊池清、1870-1947〕、広津柳浪、小杉天外〔小杉為蔵、1865-1952〕、泉鏡花〔泉鏡太郎、1873-1939〕らの新勢力にその座をゆずらざるを得なくなった」³²のである。「明治の西鶴」に、もはや活躍の場はなかった。毎日新聞社を退いた宇田川文海は、1900年の春に「天理教の機関誌『道の友』の専任記者となり、明治後期から大正中期にかけて天理教信者の列に加わり、同教の教理展開の上で指導的役割を」担うこととなる³³。また1902年には、管野スガが『大阪朝報』の記者に採用されるよう尽力する。「『大阪朝報』の女性記者となった管野スガは、同紙上で廢娼論、女権拡張論を展開して、男の不品行を非難するとともに、夫の遊蕩、蓄妾を容認する妻の態度を批判し、女性の人格の尊重と文明進歩にかなった「一夫一婦」の実現を説いた」³⁴。その後、管野スガは社会主義に傾倒し、幸徳秋水（1871-1911）のいわゆる大逆事件で処刑されることになる。一方、天理教に居場所を見出した宇田川文

³⁰ 『毎日新聞』（大阪）、1890年4月24日、第1面。

³¹ 吉田香雨、『当世作者評判記』（大華堂、1891年）、25頁。

³² 昭和女子大学近代文学研究室、『近代文学研究叢書』第31巻、228頁。

³³ 大谷渡、『教派神道と近代日本——天理教の史的考察』（東方出版、1992年）、35頁。

³⁴ 大谷渡、『教派神道と近代日本』、42頁。管野スガと一時婚姻関係にあった荒畑寒村（荒畑勝三、1887-1981）は、「彼女は大阪の小説家宇田川文海に師事して小説家を志したが、しかし作家として成功し得る才分があったとはどうも思われぬ。それ故、その名を署した幼稚な小説を大阪の小新聞に発表して、やっと一家を支えるだけの金を得るためには、文海の力に頼るとともに貞操をもって支払わねばならなかったとのである」と記し、管野スガが宇田川文海の愛人であったとほめかしている（荒畑寒村、『寒村自伝』（岩波文庫、1975年）、上巻185頁）。こうした記述に端を発し、「魔女、妖婦といったおおよそ彼女の実像とはかけ離れたレッテル」が彼女に張られることとなるが、「管野スガは、宇田川文海の妾などではなかったのであって、宇田川と師弟の関係にあった管野が、宇田川の思想的影響のもとに廢娼論、女権拡張論を唱え、キリスト教さらには社会主義へと接近していったというのが本当なのである」（大谷渡、『管野スガと石上露子』（東方出版、1989年）、3-4頁）。

海の晩年は穏やかなものであったらしく、1930年1月6日に永眠している。

宇田川文海のシェイクスピア翻案作品

ところで宇田川文海は、有名な『何桜彼桜銭世中』以外にも、いくつかのシェイクスピア翻案作品を残している。坪内逍遙（坪内雄蔵、1859-1935）は、1916年に書かれた「日本に於ける沙翁研究、翻案及び上演の略史」という随筆で、「新聞紙の続き物として翻案された沙翁物」について以下のように説明している。

其最も古いのは大阪『朝日新聞』及び『毎日新聞』所載のそれで、翻案者は宇田川文海氏である。それは『四つの緒』と題した『アズ・ユー・ライキ・イット』、『何桜彼桜銭世中』と題した『マーチャント・オブ・ヴェニス』、『阪東武者』と題した『オセロー』、『船戦』と題した『マクベス』、『悪縁』と題した『ロミオ・エンド・ジュリエット』などで、文海氏の話に拠れば、第一は明治十四五年〔1881-1882年〕頃（?）、第二は同十七年〔1884年〕の春、共に『大阪朝日』、次に、第三の『阪東武者』以下は『大阪毎日』の所載で、各々二十五年〔1892年〕九月、二十七年〔1894年〕十二月、三十年〔1897年〕十一月よりといふ順序であつたといふ。其中『四つの緒』は『汝所好』と改題して、後に東京の金港堂から一冊子として発行したやうに記憶する、といふ翻案者自身の話。³⁵

ここでの坪内の記述の根拠とされている「翻案者自身の話」には、いささかの記憶違いが含まれている。ここに挙げられている作品のうち、最初に公刊されたのは『何桜彼桜銭世中』であり、これは先述のとおり、1884年ではなく1885年の春に連載され、舞台化された。こうして「一回新紙に掲げて世の喝采を博し二回劇場に演じて世の喝采を博した」作品は、ここでは言及されていないが、「三回世の喝采を博せんと欲して」翌1886年1月8日に大阪の和田文宝堂から

³⁵ 坪内逍遙、「日本に於ける沙翁研究、翻案及び上演の略史」、『逍遙選集』第5巻（第一書房、1977年）545-577頁、558-559頁。

単行本として刊行されている³⁶。

宇田川文海の話では、『お気に召すまま』を翻案した『四つの緒』は非常に早い時期の作品とされている。しかしながら、実際にこれが『朝日新聞』の紙面を飾ったのは、1888年5月13日から7月12日のことである。この作品は、作者の記憶どおり『汝所好』と改題のうえ、その年の12月24日に単行本として出版されている。ただし出版したのは「東京の金港堂」ではなく大阪の駿々堂であった。

次に宇田川が執筆したシェイクスピア物は、『ロミオとジュリエット』を下敷きにした『悪因縁』であるが、これは坪内の記述から欠落している。この作品は1889年6月15日に連載が始まり、原作の第二幕に相当する部分までをかなり忠実に描き終えた7月9日に、突如中絶している。

編者去る一日湖東鉄道の落成を幸ひに、……美術思想の養成もチト烏許がましけれども……小説の材料蒐集、途中の風景眺望、且ハ養痾の漫遊を兼て、名古屋まで至りし汽車の内にて、參州岡崎の人、好古道人なる一奇人に邂逅し、其駅に骨を埋めたる、烈女勝子の伝の詳細を聞得たるが、其事稍古きに過るに似たれども、勝子が氷霜の節、鐵石の心、凜乎として猶生るが如く、百歳の下人をして欣慕の想に耐ざらしむるの條あれば、今日道德敗頽の時に當つて、此る烈女の伝を描すハ、又脂粉社会に小補無んばあらずと思へるまゝ爰に暫時悪因縁の記載を中止し、明後日の紙上よりして、之に代るに此の烈女勝子の伝を以てすれば、諸君請ふ其意を諒し玉へ、³⁷

そしてこの『烈女勝子伝』の連載中に、宇田川文海は朝日新聞社を退社することとなるのである。

『悪因縁』に関しては、松浦直治が二つの興味深い証言を残している。その第一は、この翻案が「上演を重ね、単行本となった」とする記述である。おそらくこれを根拠として、昭和女子大学近代文学研究室は『悪因縁』が「大好評でくり返し劇化上演された」とし、河内厚郎も「道頓堀でくり返し上演され、

³⁶ 宇田川文海、「自序」、『何桜彼桜銭世中』。「自序」に頁数は打たれていない。

³⁷ 『朝日新聞』（大阪）、1889年7月9日、第3面。

人気を博した」としている³⁸。しかしながら、そもそも連載自体が中断しており、その後『悪因縁』が単行本として出版された形跡もない。私が確認した限りでは、舞台上演に関する具体的な情報を見つけ出すことはできなかった。第二は、「これと同時代に東京の川尻宝岑（ほうしん）〔1843-1910、歌舞伎作者〕が同じ題名、同じ趣向の脚本を書いて未発表のまま筐底に蔵していた事実が、のちのその子川尻清潭〔1876-1954、歌舞伎研究者〕によって明かにされた」というものである。これについて松浦は「偶然の暗合とは考えられぬが、文海がどのようないきさつでこれを手に入れ、どのように脚色し直したか、今日ではうかがい知ることができない」³⁹としている。

毎日新聞社移籍後のシェイクスピア翻案に関しては、宇田川文海の記憶は正確である。『オセロー』を翻案した『阪東武者』、『マクベス』に基づくとされる『船戦』、『ロミオとジュリエット』に改めて取り組んだ『悪縁』が連載されたのは、それぞれ1892年9月19日から10月19日、1894年12月17日から1895年2月5日、1897年11月3日から12月25日のことである。なお、昭和女子大学近代文学研究室は、この『悪縁』を『悪因縁』が再掲載されたものとしているが⁴⁰、両者は全くの別物である。『悪因縁』は、中絶しているものの連載された部分は、先述のとおり『ロミオとジュリエット』にかなり忠実である。それに対し、『悪縁』は極めて自由度の高い翻案であり、原作には登場しない鈴木玄伯なる幫間医者が登場し大きな役割を果たす、佐伯玄蕃（ティボルト）が玉尾（ジュリエット）に懸想する、尾形お高（ロザライン）が香取主税（パリス）に片思いしているなど、『ロミオとジュリエット』を知っている読者にとっては予想外の展開が連続する作品となっている。

こうした翻案作品について、坪内の評価は否定的である。彼は「宇田川氏の翻案の如きも、原訳者は別にあるらしく、随つて原作と比べると、翻案は、ほんの荒筋を移しただけのものになってゐるのは勿論の事である」と主張する。近代的オリジナル尊重主義の立場に立っていた坪内にとって、宇田川文海を

³⁸ 松浦直治、「大阪朝日新聞掲載小説の変遷」、89頁。昭和女子大学近代文学研究室、『近代文学研究叢書』第31巻、227頁。河内厚郎『もうひとつの文士録——阪神の風土と芸術』（沖積舎、2000年）、19頁。

³⁹ 松浦直治、「大阪朝日新聞掲載小説の変遷」、89頁。

⁴⁰ 昭和女子大学近代文学研究室、『近代文学研究叢書』第31巻、252頁。

じめとする人々が著した翻案物が、「二重三重に手を経るのを例とする」、「沙翁研究の歴史上には価値の乏しい者」にしか見えなかったことは疑いえない⁴¹。宇田川文海が英語を読めなかったことは確かなようで、昭和女子大学近代文学研究室は、彼が「その盛時に、五、六人の書生をおいていたが、その中で優れたものは米国に留学させている。それは彼自身が語学に疎かったためその助手を育てる気持ちからだった」という遺族の証言を記録している⁴²。しかしながら、ここで想起すべきは、宇田川文海が、「原稿者」との協働作業に積極的であり、そのことは翻案物に限らなかったということである。ピーター・ストーリブラスは、シェイクスピアの時代のイングランドにおける演劇制作について、次のように指摘している。

ひとりの権威ある作家ではなく、協働関係のネットワークが演劇を作り上げた。通例2、3人の書き手の協働関係、書き手たちと劇団の協働関係、劇団と出版者の協働関係、植字職人と校正職人の協働関係、出版者と検閲担当役人の協働関係。「個人の生み出したテキスト」など存在しなかった。だからこそ、いまわれわれに残された戯曲は、その協働関係によって——古い劇が（多く場合別の書き手によって）新しい上演のために書きなおされたり、役者たちが部分的にあるいは徹底的に台本を変貌させたり、印刷されたものに書き手が新しい場面を書き加えたり、テキストが検閲されたりして——さまざまな形をとっているのだ。⁴³

宇田川文海は、近代的な芸術家としてというよりは、まさにシェイクスピアと同じような「協働関係のネットワーク」のなかに身をおいて、数多くの「原稿者」たちとともに創作活動を行っていたのであり、そのことが多様な「屈折物

⁴¹ 坪内逍遙、「日本に於ける沙翁研究、翻案及び上演の略史」、559頁。

⁴² 昭和女子大学近代文学研究室、『近代文学研究叢書』第31巻、254頁。ちなみに、管野スガの弟の正雄は「宇田川文海の書生として、宇田川宅に住み込んで」おり、「やがて勉学を目的として渡米」している。宇田川は「養女初と、書生の正雄を夫婦にして後継にするつもりで、正雄をアメリカに送ったともいわれるが、それが事実だったかどうかについては不明である」（大谷渡、『管野スガと石上露子』、40頁および42頁）。平は、『何桜彼桜銭世中』について、河島敬蔵（1859-1935）の翻訳が小宮山天香の手を経て宇田川文海に提供されたのではないかと、という仮説を提示している（『ヴェニス商人』と『何桜彼桜銭世中』、174-175頁）。

⁴³ Peter Stallybrass, 'Shakespeare, the Individual, and the Text' in *Cultural Studies* (Ed. Lawrence Grossberg, Cary Nelson and Paula Treichler. New York: Routledge, 1992), pp. 593-612. pp. 601-602. 引用は拙訳。

(refractions)』⁴⁴を生み出したのである。宇田川文海をはじめとする人々の翻案における原典からの逸脱は、嘆かれるべきものではなく、むしろ喜ばれるべきものである。「アダプテーションに二重の性質があることは、原作テキスト〔the adapted text〕に近いこと、あるいは忠実であることが判断基準や分析の焦点でなければならないことを意味しているわけではない」⁴⁵。翻案作品は、それが逸脱を内包しているからこそ、豊かな作品となるのである。

おわりに

宇田川文海は、明治の大阪を代表する文筆家の一人として、大きな足跡を残した。彼が活躍した新聞連載小説というメディアについて、鶴見俊輔は次のように述べている。

明治以降の急速にうつりかわる社会条件にもまれて、日本国民は、新しい社会条件に適応することにくるしみ、不安を感じてきた。新しい社会条件の下で、自分たちの幸福をどこに求めたらよいのか。他の人々は、どのような幸福を求めているのだろうか。そういう幸福感の見本を、新聞小説は、明治以来、日本国民にあたえつづけて来た。⁴⁶

鶴見によれば、新聞連載小説は三つの特徴を持っている。「毎日すこしずつ、よみつがれてゆく形」を取ること、「実話を中心としていること」という二つの性格を指摘したうえで⁴⁷、鶴見は次のように続ける。

第三に、新聞小説は、新聞が全紙面をつかって描く同時代の社会条件において、いかにして幸福が可能かを読者とともに考える。実は、それこそ読者の問題なのである。新聞の一般紙面が、同時代の社会にある

⁴⁴ André Lefevere, 'Mother Courage's Cucumbers: Text, System and Refraction in a Theory of Literature'. *Modern Language Studies* 12:4 (1982): pp. 3-20. 引用は拙訳。

⁴⁵ Linda Hutcheon, *A Theory of Adaptation* (London: Routledge, 2006), p. 6. 引用はリンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』(片淵悦久・鴨川啓信・武田雅史訳、晃洋書房、2012年)、9頁。

⁴⁶ 鶴見俊輔、「新聞小説論」、『限界芸術論』(ちくま学芸文庫、1999年) 245-253頁、247頁。

⁴⁷ 鶴見俊輔、「新聞小説論」、248頁。

数々の障害物をそのまま傍観者として報道するのに対して、新聞小説は、それらの障害物をこえつつ走る架空の英雄の姿を想像してえがき、読者を力づける。読者の人生意欲を増進させるのである。⁴⁸

宇田川文海の作品は、まさに「幸福感の見本」を提供し、「読者を力づけ」た。『蜃気楼』において女性参政権問題を描いた宇田川は、実生活においても管野スガという女性ジャーナリストを育てるという大きな業績を残している。彼のシェイクスピア翻案作品もまた、演劇改良運動という流れのなかで、旧劇的な「色」を廃して西洋的な「恋愛」を育もうとするものであり⁴⁹、管野スガが主張することとなる廃娼論や一夫一婦制といったイデオロギーと親和性の高いものであった。管野スガの主張には、宇田川がこれらの作品で描き出した「幸福感の見本」の影響を見てとることができる。その意味で、宇田川文海という文筆家を、先駆的フェミニストの一人と呼んだとしても、あながち的外れとは言えないだろう。忘れられたフェミニスト宇田川文海——彼の正当な再評価は、まだ始まったばかりである。

(東京学芸大学 准教授)

⁴⁸ 鶴見俊輔、「新聞小説論」、249-250頁。

⁴⁹ 以下を参照。近藤弘幸、『『お気に召すまま』の恋愛塾——明治日本はシェイクスピアで西洋を学んだ』、『今を生きるシェイクスピア——アダプテーションと文化理解からの入門』（米谷郁子編、研究社、2011年）191-220頁。近藤弘幸、「脱「色」された『オセロー』——宇田川文海『阪東武者』（一八九二)」、『シェイクスピアと演劇文化——日本シェイクスピア協会創立五〇周年記念論集』（日本シェイクスピア協会編、研究社、2012年）158-179頁。